

# 西方アジアに於ける考古學的活動 (下)

——一九三二年——一九三四年——

禰津正志

## VI フェニシヤ

ラス・シヤムラにおいて、<sup>①</sup>国立美術館・文部省及びラツタキエ政府の資金を受けたシエーフアとシユネエ兩氏がその研究をつづけた。キユネフォルムに由來するアルファベットをもつセム語の原文によつて、われわれが最古のフェニシヤ語を知り、人種の深い混血を立證したことはこの遺蹟の最も興味を引く所以である。ラス・シヤムラでは三層が區別され得る、(一)は紀元前第二の千年の後半期と一致する。(二)はその前半期と一致する。

(三)は第三の千年と一致する。第一層では、エヂプト品の模造物が発見されたが、更にその類似が島の影響によ

つて説明される金のコップ中の一のキプロス式遺物を認めた。この特例はキプロス島の特にシリア側の正面のエシコミの地質調査の必要をよび起した。既に古くこの地點での英國の發掘は興味ある結果をもたらしたが、之等の發掘は二三の人々が主張してゐる様に前第八世紀ではなくて、前第十三—四世紀に發見した遺物を報告すべきである。

<sup>①</sup> Fouilles de 1931 et 1932 (Syria, XIII, 1932, p. 1-27 et XIV, 1933, p. 93-127)

第二層では、ラス・シヤムラからバレスチナまでつく土器の結合を立證するカナ人の土器が出る。この層で

は、遺物はもう模倣品ではなくて、エジプトからの直輸入である。これはセヌスリト・アングの名で呼ばれる第十二王朝のグループである。

ミネ・テル・ベイダの二つの墓地、古い城塞と同じ丘の墓地とからは、非常に細密に細工した多数の石の墓が現はれた。發掘隊は二階つきの儀禮的建物を發見した、これは灌祭が多数の遺物、特に器物を保藏してゐる一階に到り得るための行ひのシステムを含んでゐる。この設備は魔術的意圖のものでこの地方が早りの時には雨をよび起すためのものであつた。

リバノン政府と文部省主催下に行はれたデエバイル(昔のビブロス)の發掘はデュラン氏の指揮の下に行はれた。この數年間に發掘された古い建物の外形は少しづつ、精確になつて來た。かくして、巨像つきの建物はローマ時代のものである。この下に、ヘレニステックの陶片で一杯になつてゐる盜のある建物があつた。デュランは第二段(遺骨が完全で積重つてをる)に多くの棺がある銅石器時代の墓所を發見した。死者はその高さの三分一は

紐飾りのついた瓶の中に入つてをり、二本の櫛がそれぞれ上と下にある。切り込みがあつて双子になつた皿が副葬されてゐる。この墓はカ・セケムイの時代に屬する。

③ Syria, XIII (1932), p. III; XIV (1933), p. 88.

中期王朝の基礎部から出た瓶の中には、武器(斧)、金又は銀の神々、これは金箔で蔽つてあり小動物がついてゐる。エジプトの技術をシリアで眞似たものである。

最後に發掘隊は五〇米で、エジプト中期王朝期の防塵で裝備されてゐる城壁を發掘した。

神殿の周壁を發掘したデュランの仕事を著しく擴張させた所のビブロスの最も顯著な遺物の中には、擬ヒエログリフ文字のある二片の青銅板がある。これは數年前デュランが發見した石片上の擬ヒエログリフ文字に似てをり、綴字書であるといふ假説を斥けるらしい。この青銅板は恐らくアルファベットの原則が發見されて、沿岸の各民族が互ひに獨立に異つた文字のシステムを選んだ手さぐりの時代を示すものであらう。その上、神殿の近

くでデュランは大發掘を行ひ、遺跡の層位的繼續を決定した。<sup>③</sup>

④ A. J. A. XXXVIII, 1934, p. 198.

ラス・シヤムラの第五回發掘報告出版は、その結果に重大性を與へた。二年前シエファとシユネーとは、金のコップと爵(酒器)とを發見した。コップの方はコリント・イオニア兩式の中に地方的な想像の混つたモチフを再現し、後者はエンコミの象牙箱の使用を思出させる様な動態のある遺物櫃である。この遺物の一はルーヴルにあつて、そして第一層に屬し、即ち第十四世紀の前半の物である。シエファはこの器物が「フェニシア世紀の又は所謂フェニシア世紀の物として知られてゐる金屬器のうちで最古の物として分類されてゐる」と述べてゐる。

④ C. F. Shaefer: Les fouilles de Ras-Shamra, cinquième campagne (Printemps 1933). Rapport sommaire; Syria, XV, 1934, p. 105—131.

一九三四年に、シエファは第三層でオベイド土器に

西方アジアに於ける考古學的活動

比較し得る一土器を得た。第一層と第二層の下でその最も低い部分は中期王朝期のエジプト遺物によつて、第三の千年の初期と定められ、第三層では第三の千年とされ、層の最下限は八米五〇であつた。この層は單色幾何學文のある土器、次に朱彩土器を出して特徴がある。最下限が二米三五で第三の千年の初期又は恐らく第四の千年に當る第四層は、燧石器、磨石器、骨器を伴出する薄くて精巧な黄色粘土製の赤黒多彩土器を出した。シエファはこの土器を勝手にニネヴェの深層部の土器、サマラ、ムーシアン、スーザーの土器に比べてゐる。第五層は無彩土器(磨きのある條文とかつき、さした意匠がついてゐる)を出した。胴部に水平に並んでゐる十分に握れる縁が剣り把手に代つてゐる。

この層は一六米五〇で終つてゐて、第四の千年に當りシエファは、エジプト先王朝の土器に對する二三の類似を述べてゐる。この結果は非常に重要なもので、これにハマの發見を附加へれば、先史單彩土器に新局面が開かれる。その存在はすでに數年前サクチエ・デュジ

において證明されてゐる。

一九三五年の發掘で、シエファは、その土器が第一層と第二層の中間形式(前十六世紀乃至十五世紀)をなしてゐる墓地の棺と、十五世紀末乃至十六世紀初頭に當る鋪面墓地の棺とを發掘した。之等は、下に埋葬された死者にまで灌祭が達するために、一つの穴をうがつた供へ物のテーブルの設備を有してをり、死者は約一世紀後に屬するミケネ式墓の複雑な溝——この溝から死者にその供物を受けとらせるのである——を豫想させる。海洋民族がやつて來たので、この種の墓は十三世紀に終る。第九世紀には、同じ場所にある墓は多くの小室をもつてをり、その中の動産(鐵の止針や武器)や慣習(火葬が少しある)はカルケミツシユ・ヂユゼルやテル・ヤウデイエなどの棺で見られることを思出させ、異つた民族の前に立つてゐる様に思はれる。

「圖書館」の東には、二つの廣庭のある神殿がある、その平面圖と時代(第十五世紀と第十四世紀)は一九二九年に發見された丘の北西部にあるパール神殿と同じであ

る。二本の石碑には新しい神殿で發見されたアルファベットのキエフオーム文字が刻つてあり、パールの父たるダゴンに奉獻したことがわかる。

一九三五年の發掘で得た土板の中には、ベルブ・ウルとか云ふ王の子孫たるラス・シヤムラのイル・シヤル王にアツカド語で宛てた手紙がある。この署名者はイル・シヤル王に對して、ウガリトの神々が王を守るやうにと願つてゐる。だから想像されてゐる様にラス・シヤムラはウガリトである。

ヴィロロー氏が判讀を行つてゐるこのラス・シヤムラの土板はたゞに言語學の見地から許りでなく、文書の判讀に對しても、それ故にイスラエル人の起原に資料を與へるものとして、大きい價值がある。

## VII キプロス

キプロス島の發掘において、デイカイオス氏は、クリウムから近いエリミで新石器時代の遺跡を發見した。そこには四つの層が認められ、各々圓形の建物があつて特

徴をもつてゐる。下から地表に近づくにつれて、その建築は次第次第に進歩して、最後の時代の層は、元來生燒きの煉瓦の上に不規則につき重ねた石の壁から成つてをり、そして明らかに柴と干いた粘土で屋根が出来てゐる。

⑤ A. J. A. 1934, p. 290—291.

ラス・シヤムラの發掘後、シエファはキプロス島に渡り、エンコミで非常に美しい古代土器を豊富に收穫した、この土器には赤色の艶出し藥がついてゐたり、或ひは切込み意匠の赤色土器であつて、この考古學的成果は興味深いものがある。墓に近く、ビザンチン式の建物がある、これは今日まで何人も注意しなかつたものであつた。下の方で、建物の二つの層が重つてゐる。第二の建物(下)はミケネ時代である。長い間キプロス島においてミケネ式遺物の存在が疑はれてゐたが、この發見が問題を解決した。更に今後とも町や住宅の下から發見されるであらう。

西方アジアに於ける考古學的活動

## VIII パレスチナ

本節では主として大工事の活動についてだけ述べる。しかし乍ら、英國考古學々院やアメリカ史前研究學院の後援で、カルメル地方のワデイ・エル・ムガラーにおける「ガロー女史の發掘はネアンデルタール人に屬する人骨を發見した。」

⑥ Millar Burrows; *Palestinian and Syrian Archaeology in 1931* (Bulletin of the American Schools of Oriental Research, fév. 1932, p. 20—32)

ガザの少し南で、F・ベトリ卿は一九三〇年に、英國エヂプト考古學院とニューヨーク大學の後援の下に、テル・エル・アヂユルで研究を始めた。<sup>⑦</sup>最初の遺跡は第四王朝に遡るらしい、長さ一六五米のトンネルはこの時期に屬する。時代においてヒアツスがあつた後、カナ人の時代が開かれる、ここでは大きい生燒きの煉瓦建の家と浴み盎のついでゐる祭壇がある。ヒクソス時代と同じ文化である。土器は小亞細亞、シリア、キプロスから輸入

第二十二卷 第四號 七七八

された土器と結びついてゐる。棺の中には、人間と馬の遺骨が共存してゐる。

⑦ *Ibid.* p. 26.

テル・エス・スルタンとは昔のエリコの現代名である。<sup>⑧</sup>

こゝで元バレスチナ考古研究所長ガースタング氏が一九三〇年以來四期に互つて發掘を指揮した、この結果つぎのことが判明した。エリコはその起原を青銅器時代の前二千五百年頃に發するが、然し最初の築城の試みが厚さ約十二米の生焼き煉瓦の城壁（狭い門と一基の塔がついてゐる）を設けたのは青銅期中期の約二千年頃にすぎない。この都市の最高點はヒクソス時代（一八〇〇年—一六〇〇年）に屬する。築城は石の斜堤、胸壁、外濠を有し、多くの商店の跡や、この時代の習慣として、所謂ヒクソス人の多數の甲蟲（古代人が崇拜した）がある。この時代の末にこの町は明らかにエジプト人に破壊された。第十五世紀に城壁が再建された。この時代のツトメス三世及びハッチブストの甲蟲が得られ、一つの墓から五百以上の器が出た。ガースタングによると、エリコ

の城壁は一四〇〇年頃地震によつて破壊されたのだらうといふことである。聖書が書いてゐるのはこの城壁のことだらう。この説明は、イスラエル人のエジプト脱出が十五世紀の中頃（他の考古學者が望む様に十三世紀ではなく）だとする。特にヴァンサン氏はカースタングの編年に反對してゐる。彼はエリコの期間は一二〇〇年頃まで認められ得るとする。

⑧ J. Garstang; *Jericho: City and Necropolis*. (*Annals of Archaeology and Anthropology*, Liverpool, XX (1933), p. 3—42).

⑨ H. Vincent; *Céramique et chronologie* (*Revue Biblique*, 1932, p. 266—276).

ハーヴァード大學の發掘隊はかつてサマリア（今日のセバステエ）においてオムリとアチャブの城を發見した。<sup>⑩</sup>英國考古學院のクロフツト、ハーヴァード大學のレーク、エルサレムのユダヤ人大學のスキユク博士が仕事をつゞけてゐる。オムリ期より古いものは何一つ出ないが、イスラエル人の時代の都をかこんでゐる城壁の

一部を發掘した。恐らくベルセフォオーネに捧げられた神殿、ローマとヘロデ王の時代に屬する體育場が發見された。一九二八年アルスラン・タツシユで發見された物によく似てゐる素晴らしい象牙製品が九世紀から八世紀頃の層から得られた。

カイファの南東にあるメヂツド（今日のテル・ムテゼリム）の丘はシカゴ東洋研究所によつて發掘された。發掘はギユイ氏が指揮した。その使用した方法はアリシャ―で用ひたのと同様であつて、丘の表面を二五米平方に分け、發掘は土地の削磨法で行ふ。他所と同様にメヂツドでも、土器が最も重要な編年の指標であつた。一行は傍の丘及び、一部の都市城壁のある銅石器時代の非常に古い住居址を發掘した、この遺跡から多數のドリコセファルの頭蓋が現れた。この都市の西方では、水を分配する溝のシステムを發見した。これは泉にまで連る一本のトンネルで終つてゐる井戸に結合してゐる。この設備は明らかに都市が存在したことを豫想させた。

⑨ U. Burrows; Bulletin of the American Schools of Oriental

西方アジアに於ける考古學的活動

Research, Fév. 1932, p. 22—23.

⑩ The Oriental Institute, p. 234—264.

王朝時代の都市の下に、その最も奇妙な建物の一つは數百の馬を收容し得る厩舎——ギユイ氏は之を舊約聖書に書いてあるサロモン王の厩舎と同一だと論じてゐる——であるが、イスラエル人の到着以前に存在した筈のものであつて、その調査が始まつてゐる。

昔のベト・シエアンたるベイシヤン<sup>⑪</sup>は今日のテル・エル・ホズンに當る。この發掘はフィツシヤ、アラン・ロー、フィツツゲラルド氏等によつて引つゞいて行はれてゐる。前回の發掘は、ットメス王時代層(第九層)に達し、深部の地質調査が行はれた。最近の調査では更に二三の個所にまで擴げられ、同時に第五、六兩層の遺物をも發掘した(第六層は一行によればセチ王第一世、即ち一三一年—一二九二年と見られてゐる)。

⑪ Bulletin of the American Schools of Oriental Research, Fév. 1932, p. 22.

エルサレムのアメリカ考古學院とクセニアの神學院とは、一九二六年以來ベブロンBebrunの南西のベイツ・ミルシムBeyts-Milshimの發掘を、アルブライト氏の指揮で行つてゐる。氏はこゝで聖書のデビルとかキリアト・セフェルの遺蹟を發見したと思つてゐる。これは大捕虜時代の二三〇〇年頃に何度も破壊されたり再建されたりした低い遺跡である。土器によつて考察するならば、メジドで得た層と同一の結果を得た。この遺跡は深部において數層に分ち、Gと記された層は凡そ第十八世紀に當る。E層ではヒクソス期初期と同時代で、アルブライト氏によればヨーロッパの東部トルキスタンに發生して第十八、十七世紀に西アジアに來た型式のうすい石壁のある、練土城壁を發見した。圓筒や甲蟲や美しい龍骨狀の磨研土器がこの時期に屬する。ずつと後で凡そ十六世紀末に終るD層では、土器、甲蟲が青銅中期末の特徴を具へてゐる。

② W. F. Abright: The 4th Joint Campaign of Excavation at Tell-Bel-Misrim (Bulletin of American Schools of Oriental Research, no. 47, oct. 1932, p. 3—17)

「ハヴァーフオード探検隊」が働いてゐるベト・シエメシユBe't-Siemeshでは、アメノフェイス三世（一四〇〇年頃）の結婚の甲蟲が發見された。王にはサロモン王時代建設の貯藏室がついてゐる。貯藏庫、葡萄搾り場、鍛冶屋、爐は鐵器時代初期におけるこの町の農・工業的活動を示してゐる。最も面白い發見は、ラス・シヤムラのアルファベットに屬するキュネフォーム文字の圓線のついてゐる長い土板である。この文字は反對に書かれ、鏡に映してはじめて讀むことが出来る。

F・ペトリPetrie卿は、前三二〇〇年頃のテル・エル・アヂユルTel-el-Adju（昔のガザ）の原始的宮址の發掘をつゞけた。墓地では、ツタンク・アメン時代のエヂプト總督の墓が現はれ、石膏製器物や青銅器と一緒に多數のエーゲ海式、キプロス式土器を發見した。

③ Amer. Journ. Semitic Languages, etc. xviii 1934, p. 185.

テル・エル・フェルでは地震が前回に發見した建物を破壊した。アルブライト氏は城塞の内外の仕事にとりかゝ



つた。發見した土器は八世紀中葉の最も古い鐵器時代の特徵ある土器にすぎなかつた。ヂベアの第一期は青銅末期と鐵器初期（七世紀）との過渡期を形作ることが判明出來た。火事がこの町を終らせた。第二期はソール王期（鐵器初期の最後の段階）に當る。最も重要な設備は鐵器第三期とヘレニステック時代に當る。一行は同じ場所に相ついで建てられた鐵器初期の二ヶの城塞址を發掘した、これらはモアブ人の國の城塞、即ち審室つきの二重城壁で矩形をなした角塔があるアイン・エル・クデイラート（カデシユ・バルネア）やテル・ザカリヤの城塞に比較出來る。

⑩ Ibid. p. 187: B. A. S. O. R., 52, 1933. p. 6.

デル・デュヴェル（ラチス）では、スタルキー氏<sup>⑪</sup>が發掘を指揮した。丘の頂上で、ベルシヤ時代の總督の住宅を發掘し、町の防禦システムを研究出來た。

⑪ Amer. Journ. Semitic Languages. avril 1934. p. 185.

西方アジアに於ける考古學的活動

岩の中に切込まれてある墓が發見された。之等は鐵器第二期からユダヤ人王朝の末期まで重つてゐる。あるものは青銅期中葉のものである。ウルの影響を示す土器が發見された。

死海の北東にあるトレイラート・ガツスユルの遺跡<sup>⑫</sup>では、マロン、ケツプユル、ヌーヴィユ等が、第三の千年末期に當る文明の存在を立證した。青銅上期及び中期において、この町は同一文化に屬する他の町々にかまれてゐた。一行は一九三九年乃至一九三二年の三回の調査報告を發表してゐる。これには遺跡とその周圍に關する地理學的、地質學的調査もおろそかにしてゐない。この調査はパレスチナ考古學に重要な位置を占めるもので、五軒の家々から發見された壁畫——その中には解釋が困難なものも二三ある——について述べてゐる。ワデイ・タラフェにおいては、一行は一つの墓地で、青銅期第二期（二〇〇〇年乃至一八〇〇年）頃の土器と銅器、また大きい石で周圍をかこんだ廣い一種の内陣を發見した。かくて、ヨルダン河の東部地方の丘々はシリア國境のネ

ボ山から「カスピ海までも」擴つてゐる巨石文化の一時代を再現した。

- ⑮ *Telaiat Ghassoul. I. Comptes rendus des fouilles de l'Institut biblique pontifical, 1929—1932. Rome, 1934.*  
A. J. A. 1934. p. 388.

テル・ムテゼリムは古いメヂツド遺跡に對應する。ギユイ氏はこゝでシカゴ東洋研究所の爲に發掘を行つた。従來の發見で最も著しいものは、大斗がついてゐる柱のある神殿址であつた。之等は所謂簡單な原イオニア朝の型式であり、明らかにサロモン王時代(紀元前十世紀)である。發掘者は同様に石灰香のある祭壇、これは角形の四本の突出した角カクがついてをり、石灰香を焼く爲に使つた陶土製の小内障、同様に陶土製の神像を發見した。これ等はカナーンで發掘された他の遺跡と平行するものである。更に所謂ケルノスといふ形の器がある。之は陶土の凹んだ環で、小動物像の飾りがあり、この上に主なる穴に通ずる小さい水槽が接合されてゐる。<sup>⑯</sup>

- ⑯ A. J. A. XXXVIII (1931), p. 192—Illustrated London News, 26 mai 1934.

貴重な發見物中でこゝに紹介すべきものに、頸飾りや耳環、留針、垂飾、非常に簡單な手法でシリヤの豐作の女神を示した護符の形をしてゐる黄金製の寶石類がある。しかし、こゝでは非常に初步的な製作技術が問題である。この寶石類の大部分は浮彫の金葉から成つてゐる。

⑰ サマリアの發掘は一九三三年に二つの重要な結果を得た。一、高原の頂上で、一行はイスラエル期の遺跡の下で、建物の遺物と同じく青銅第一期の土器片を得た。故にオムリ都市建設前において、この遺跡に定着した人民があつたのである。二、町の北東の突出部において、二米以上の厚さと直径十三米ある壁のついてゐる塔を發掘した、この塔は七米の高さで保存され、エロボアム三世(七八二年—七四二年)の時代に定めることが出来る。この塔はハーヴァード探検隊が先年南西突出部の遺跡で發掘した塔と對をなしてゐる。

余がさきに述べた九世紀の象牙は有名なものとなつた。之は二つに分けられる、一、かつては金箔又は金色の斑點に蔽れてゐたが、全くエヂプトの影響を受けてゐる。二、これもエヂプトの影響を受けてはゐるがその人物の衣裳にはアジアの影響がある。以上二種の象牙は、チユロー・ダンデヤン氏がアルスラン・タツシユで發見してアレツボ博物館、ルーヴル美術館に收められてゐる象牙によく似てゐる。サマリヤの象牙はエルサレム博物館とハーヴァード大學のフォツグ博物館に分けて保存されてある。

アブ・ハワンの丘<sup>②0</sup>はハイファアの郊外にそゞり立つてゐる。今日では海岸から一キロ半の地點にあつて、明らか  
に昔はエスドロン平原の諸都市の爲の港であつた。この町における居住期間は青銅期最後の時代（凡そ前十四世紀）からローマ時代までつゞく。發見遺物の性質は著しくキプロスの影響を示し、特にラス・シヤムラの古物によく似てゐる。ペルシヤ時代（五世紀—四世紀）に當る

第二層の土器はテル・エル・フアリアとテル・ヤンマ（エヂプトの第廿三、廿六王朝）及びアトリト（五世紀）、サマリヤ（ペルシヤ朝）デゼル（ヘレニスチック時代）で發掘された遺物に非常に近い。この時代の建築の特徴は、メジド第四層で見られた様に柱を多く用ひてゐることで、發掘者は之をサロモン時代としてゐる。

②0 A. J. A. XXXVIII, 1934, p. 288.

ヨルダン河東のエラツシユでは、アメリカエルサレム學院とエール大學の合同調査隊がグリユツク氏指揮の下に行はれ、凱旋門の正面の遺跡の南側部分を發掘した。この凱旋門はローマ時代のもので、一像を収めてゐる壁龕が穿つてある間口によつて、左右兩側に延びてゐる。一行は競馬場平面を掘出すのに専念した。この競馬場の入口が見つかり、大玄關には小さい二つの門がより添つてをり、記念碑を破壊した筈の火事の跡がついてゐる。この遺跡地方全體はビザンチン時代、アラビヤ時代にも人が住んでをつた。南門には、壁柱に屬してゐる第

二世紀(A.D)の美しいコリント・イオニア兩式混合大斗が發掘された。北門の(ダマスコ側)外ではアエリア街道が擴り、これも發掘された。アエリア街道と小路との交叉點は方形廣場になつてをり、そこにはトレトラピルと呼ばれる四本の柱石が立つてゐる。各柱石は四本をグループとした圓柱を支へてをり、圓柱のまん中には祭壇がある。その後まもなく、この廣場は圓形であることが判明した。一五〇年頃(A.D)の墓が掘出され、陶土製の小像片とラムブをたくさん提供した。

② B. A. S. O. R. 1934. No. 53. p. 2. No. 54. p. 5.

A. J. A. XXXXVIII, 1934. p. 197.

一九三三年にアメリカ考古學院はバレスチナの東部發掘を始めた。グリユツク氏はアラバーを貫いてアカバーまで擴るセラクの部分の第一回調査を報告してゐる。一行はこの途上で屢々その厚さの中に灰色を帯びナバテースでよく發見された赤褐色土器を多く得た、そして幾何學文(水平線、階段、碁盤文、菱形に交叉する斜行文)の彩

色片を得た。その中で特徴あるものは、無光澤帶と丁寧に磨いた帶文とが交互に並んでゐる意匠と、また灰白色の釉薬を塗つた褐色粘土の土器とである。多數のナバテースの城塞址も發見された。キベルト・エン・ナハース地方では、前一一〇〇年乃至八〇〇年頃の一土器を得た。これは昔の銅山と鎔鑛場の中心地である。第三回の探檢はネボ山地方で、多數の鐵器時代初期の建物及び銅・鐵の鑛脈を發掘した。第三回探檢はエドム國の北方國境へ向ひ、古い時代に盛に使用されたトランスヨルダニヤを貫く商業路を認めた、この途上には前二二〇〇年から一八〇〇年頃の遺跡が多く存してゐる。

③ B. A. S. O. R. Sept. 1934. p. 3.

A. J. A. XXXXVIII, 1934. p. 196—197.

グリユツク氏によれば、エドム國の城塞の重要性は、エヂプトから脱出したイスラエル人が何故にこの地方を横斷しないで、之を迂回しモアブ地方を通らねばならなかつたかを説明するものである。この城塞の年代も亦出エヂプト記が第十三世紀以前に存在しなかつたことを證明

するものである。

## IX 結 び

要するに、メソポタミア、イラン、アナトリアの發掘は、総合的土器編年の設定によつて、更によく原史時代を知り、歴史時代に之を結びつけさせるものである。従つて、われわれが遡り得る最も古い時代からこの地域全體に亘つて共通の特徴をもつた大きい文化が存在したことがわかる。

フェニキアとバレスチナでは、歴史時代は特に新しい發掘で詳細になつた。こゝでもまた、土器が同質性を示してゐて、時代の設定に役立つてゐる。

×

最近数年間の考古學的發掘によつて、歴史時代以前の西方アジアにおける文化の何物なるか大凡明らかになつた。

まづ第一に、メソポタミアでは、少くともその三分の二以下の面積(スメル、アツカドニ國)においては獨自性

を保つてゐるとしても、上シリア、アツシリア、イラン高原は(メソポタミアと緊接な關係にはあるけれども)同質の一文化を持つてゐた、この文化は二三の點で南方と異つてゐる。かくして、南方は所謂オベイド期(單色土器)、ウルク期(彩色土器なし)、デエムデット・ナズル期(多彩土器)を知つてゐるのである。北方でも以上の同じ時代が存してゐるが、之等より以前の時代に、ニネヴェエ、アルバキヤ、テル・ハラフ・サマラ及びベルシヤではレイ・ヂャン・カシヤン、そして恐らく、フェニキヤ北方のラス・シヤムラで發見された彩色土器の時代があつた。

この原始諸文明を造つた人々は何者だらうか? スメル人か他の民族か? この問題に答を與へることは現在では全くむづかしい。

フランクフォルト氏は、スメル人はオベイド時代以後であるとする、ヨルダン氏はワルカの第六層以後、クリスチャンとマツケイ兩氏はウル第一王朝以後だとする。假説を支へる爲に頭蓋の細片までも用ひる人類學も、

もはや問題に解決を與へることが出来ない。たゞ西方アジアの墓地で發見された最古の頭蓋はブラキセファルとドリコセファルの二大變種を示してをり、故にその混血が行はれたといふ程度である。

セム人に歸し得る所の、又その出現の時によつて兩民族の合同の時期を定めうるスメル文化の特殊性といふ物が少し存在するだらうか？ フランクフォール氏は多彩土器をセム人のものと定めるに傾いてゐる。チユロー・ダンヂャン氏は、スメル人の計算法が六十進法（セム人のは十進法らしいのに）なのでセム人の遺存を示すとすゝる。コントノー氏は圓筒印においてセムの遺存を認めてゐる。さて、この特殊性はウルクとヂエムデット・ナズル時代に一致してゐる。アジアとエヂプトの間に歴史以前に存在した接觸が（ウルクとヂエムデット・ナズルの兩期に歸し得られるところの）恐らくカナーンや上シリアの住民たるスメル文化を受けたセム人を媒介者としたのであらう。この媒介者は、セム文化が多く存しエヂプトにスメル文化の二三の特殊なものを傳へたエヂプト語に

その獨特の影響を及ぼした。他方では、ラス・シヤムラの土板はカナーンの國から散在したセム人の中心の一部をつくつた傳統を残してゐる。すべての人々は、ウルクとヂエムデット・ナズル兩時代以來、セム人がカナーンに居たといふ點で一致してゐる。彼等はヂエムデット・ナズルの土板以來現れてをるが、スメル語におけるセム語の存在によつて、その影響は徐々にメソポタミア地方へ擴つた。いづれにせよ、スメル人がベルシヤ灣近くとその文明を建設した時には、この文化は全く純粹なセム文化に染つてゐなかつた。故にセム人との接觸はなかつた。この時代における下メソポタミアの不安定な状態、チグリスやユーフラテス河の泥土で出來た小島の散在する沼澤、漸く人間が住める様になつた之等の地方は、海から生れた文化をベローズが維持した傳統を考慮したかも知れない。

最近の發掘でのもう一つの收穫はメソポタミアの偉大な歴史の始めをヂエムデット・ナズル期においたことである。この期の圓筒印章（その自然主義において眞とに

完全なもの)が最も重大な遺物となつた。ウルカの發掘は之等を復活し、この遺物の内容、意匠において、スメル以前の藝術らしいものを再現した。さらに、ウルカの土器がスメル人の日常用器を示すならば、一九三四年に發見された石碑は人物——後になつてテル・ハラーフの彫刻に見られるアルメニヤ人式のプロフィールをもつた人物——を象つてゐる。デエムデット・ナズル層と共に、先サルゴン期と同様に發達した洗練された(非常に著しい)藝術が存在する。

デエムデット・ナズル期の後に先サルゴン期又は先アガデ期が開かれる、その多くは既に有名であるが、ハフアエ、ウル、テルアズマール、マリの發掘が非常に材料を豊富にした。この期の問題の一つはその編年である。或る人々は、その期間は數世紀に及ぶと考へてゐる。この時期の遺物を互ひに結付ける緊密な類似によつて、コントノー氏は最少限度の期間を考へることが出来るかと考へた。即ち、メソポタミア人は決して具體的歴史を作らなかつたが、眞の歴史ではないが多くの事件を反映したこ

の期の資料をわれわれに残してゐる。この期間中の王の名簿や諸王朝、その期間、その人數、その名前は正確ではないし互ひに矛盾を示してゐるが、恐らく同時的存在が非常に多く存するといふことを慎重に考へさせるのである。

第二には、メソポタミア文化だけを切離して研究してはならない。この文化はエーゲ文化、エジプト文化と連帶してゐる。メソポタミア文化の初期に對して出来るだけ年代を引下けることは承認される、若しエジプト學者がエジプト文化に對してこの方法を採用したならば。一般にエジプト學者がチニット期を三二〇〇年よりも低く下け得ない様に、メソポタミア文化の時代も餘り低くは下けられない。かくてデエムデット・ナズル期の終末をチニット期の間におく、この後に先アガデ期が開かれる。

カナーンの國では收穫は少いものではなかつた。最近の發掘は歴史以前に彩色土器文化として知られた廣大な地域の北方部を明らかにした。その結果は、南方部やバ

レスチナと同様著しいものであるが、その概報はバレスチナ考古學のオーソリテイ・ヴァンサン氏によつて行はれてゐる。メヂツドの最近の調査報告において、氏はバレスチナ考古學は最古の時代まで遡らないが、たゞ第三の千年(ウル第三王朝)の最後の三分の一位までは遡ると主張し、且メソポタミヤ考古學と同様に今では舊石器時代までは研究され得ると述べてゐる。ヌーヴィユ氏が述べてゐる様に、バレスチナは舊石器後期において、二種の石器工業を同時に有した、即ち、打裂式(テヤシア式、ルヴロワ式)と兩面式(シユレ式とアシユレ式)で、之にムステリア式がつゞく。舊石器前期においては、バレスチナの工業は主としてカブシア式であつた。これによつて中石器期に對應するナチュフイア式(之は更に四つの時期に分けられる)が来る。最後に銅石併用期がタユニア式、ガスリア式に對應する。ガスリア式は時としてタユニア式と同期と考へられ、その出現は第四の千年の末か、第三の千年の初頭と見られてゐる。次にカナーンは、青銅期第一期に當る頃に現はれる。さて、メヂツドで

は、七つの層が決定され、第一層は凡そ二千年頃か、エプト第十二王朝の初めに當る。第七層は考古學的には不毛な層の上に重つてゐるが、地山ではない。これはまだその試みられてゐない文化を示してゐる。第四層では、一つの過渡期を示す特徴が多く見られる、即ち、塔の出現、土器面彩色の出現、櫛目文土器、圓形建築の小さい側壁の一つを含んでゐる「後陣形」プランのある家等々。銅文化をすでに所有してゐたこの層は理論上では金屬時代の初期と考へられ得る。第四層の下の第五層では、粘土の上に圓筒の押型(ウルク第三層、スーザの壺の口や、プロト、エラム期の土板等の圓筒に比較出来る)があり、デムデット・ナズル期(こゝでは時期は恐らく三千年と見る)に近いものとされ得る。この層から第七層までは、多くエヂプトの前王朝時代と似てゐる。それ故に、ヌーヴィユ氏が第七層を以て凡そ第四の千年頃とし、またこの第四の千年の初期はバレスチナでは恐らく銅石併用期の始めと認めたのは、故なきことではない。

② Vers l'aube de l'histoire en Palestine; R. B. 1934. p. 403—



431.

⑳ R. M. Engberg & G. M. Shipton: Notes on the Chalcolithic and early Bronze Age Pottery of Megiddo: Oriental Institute, Chicago, No. 19, 1934.

㉑ Le préhistorique de Palestine: R. B. 1934, p. 237 以下

青銅期古期のベト・シヤンの八、九層に比較され、またデユナン氏のビブロス及びインゴルト氏のハマにおける成果、さらにマロン氏のガスルに於ける四層に比較されるメゾドの全七層は、カナーンにとつては、前紀第四の千年の始から第三の千年の末までの諸文明の完全な繼續であることを示してゐる。(丁)